竹内家旧蔵資料

引札展（ひきふだ）

12月5日(木)～2月25日(火)

旧藏内邸(築上町上深野396)

萬荒物商　青染紺屋　履物商
築上郡上城井村本庄　角屋事　岡野商店
二人がかりで引く鎮西八郎為朝の大弓と二人で引く下駄の鼻緒の丈夫さをかけた履物屋らしい図柄。

大勉強　米穀買入　荒物商　醤油醸造
下城井村　正札現金　井上商店
長寿三人衆「三長命」。浦島太郎、平安時代の武将三浦大介義明、中国神仙の東方朔。

■引札とは

引札とは今のチラシ広告のことで、商品経済が発達した江戸時代後半の文化文政期(18 世紀末～19 世紀初)から作られるようになった。当初は商家が店の宣伝のため店名、所在地、商品名、宣伝文句など文字を主体とした一色か二色の簡素なものだったが、明治になると年末年始に商店が得意先に配る広告を兼ねた「正月用引札」が登場する。正月用引札は錦絵(多色浮世絵)を継承した木版手摺りの多色印刷物で、派手で華やかな、まさに「客の目と心を引く」ものとして流行し、都会だけでなく地方の商店も大量に利用した。明治 30 年代になると西洋のポスターから影響を受け、石版多色刷りとなり、手書きのような滑らかな描写と濃淡のある色彩など表現豊かなものとなった。一般家庭では年末になると、配られた新しい引札を壁や障子に貼り、華やかな心持ちで正月を迎えたであろう。一般に江戸では引札(ひきふだ)、上方では散(ちらし)と呼ばれ、引札の版元は大阪が多く、版元は図柄の見本帖を地方の印刷屋経由で商店に見せて注文を取った。商店は屋号や商品名、住所などを地方の印刷屋で別に刷ってもらう方法を取っていたようだ。今回展示した竹内家旧蔵の引札は明治 30 年代から大正時代にかけての旧上城井村、下城井村の商店が主で、旧椎田町や大分県中津市のものも若干含まれる。

■竹内家について

今回展示する引札は、築上町伝法寺の故竹内重利氏(1913-2016)から寄贈された資料で、計 45 点のうち、29 点である。重利氏の祖父、竹内徳松(1859-1947)は地域の有力者として若くして才覚を発揮し、人望も厚く、区長を 18 年間務め、39 歳から村議会議員を 26 年間勤めた。後に農事改良活動や肥料購入などの信用購買組合を設立する等、地域の発展に貢献した。また藏内家の小作の管理事務も行っていた。

竹内氏の住宅「旧竹内家住宅」(築上町伝法寺/岩戸見神社下)は、重利氏が 103 歳で亡くなる直前の平成 27 年 8 月、町に寄贈され、現在は、地域おこしグループ「文殊会」が「古民家食庵　伝法寺庄」を運営する。

■引札の魅力

引札の図柄は七福神、福助、福の神、美人が圧倒的に多く、中でも商売繁盛の神様「恵比寿」が最も多い。また長寿のシンボル浦島太郎や高砂の翁媼(おうおう)など縁起物の図柄が好まれ、汽車や電話機、郵便配達など文明開化を象徴する図柄も多い。暦の引札は明治 5 年(1872)の太陽暦採用後 30 年経っているが、新暦と旧暦両方が書かれ、また日清、日露戦争の戦勝を祝ったもの、中国暦と日本暦を記載したもの、軍人の顔写真などがある。これら引札は近代の消費社会や印刷技術、世相や風俗、信仰、歴史観、道徳観、また洒落や遊び心などこの時代の思想と空気を読み解く重要な資料である。

【参考文献】『引札　消費文明を創ったポップアート』2001　印刷博物館企画展図録

寿老人の書初め　長野酒場(伝法寺)

日露戦争すごろく　末松商店(伝法寺)

金をまく福の神　大木商店(本庄)

金の成る木と和装美人　牛乳店(高塚)

恵比寿の電話交換　長野酒場(伝法寺)

汽車に福助　末松商店(伝法寺)

明治 41 年(1908)の略暦。
向って右側に太陽暦。左側に清国暦(宣統帝 4 年)を記載。

折紙をする女性と熨斗　浅野友太郎(伝法寺)

左端に「明治 36 年 7 月 1 日印刷同年 8 月 30 日発行　印刷兼発行者　大阪市東区備後町 3 丁目 27 番屋敷　平民　古島竹次郎」とある。古島印刷所は引札の版元。

恵比寿の大盃　長野酒場(伝法寺)